

巻 頭 言

高度情報産業などの発達で「グローバル社会」ということが言われて久しい。今回の経済危機はそれをあらためて私たちに認識させた。グローバルな社会はあくまで、文化や人的交流が人々に豊かな生活をもたらしてこそ意味がある。価値観の違いや文化の壁を乗り越える知恵や勇気や行動で実現される社会である。

アメリカでは史上初のアフリカ系大統領バラック・オバマ氏が就任した。人種混交の社会で選挙期間中も多くのミラクルを果たした彼は、イリノイ州の上院議員を一期務めている。数年前の早春、筆者はシカゴに滞在し、高級住宅地オークパークに、アーネスト・ヘミングウェイの生家や旧帝国ホテルを設計したフランク・ロイド・ライトの事務所を訪れたが、この街もまたアメリカの典型的な町、人種の坩堝であった。

作家の家は尖塔のある瀟洒な邸であり、近隣にはライト設計のアン王朝様式やチューダー様式、プレイリー・スタイルなどの壮麗な大邸宅が20軒ほど建ち並ぶ。昼下がりの薄闇の中、建築家を志す学生や観光客とともに周辺を散策した。その中にアイルランドから来た夫婦がいた。彼らはアメリカ在住の娘を訪ねてきたが、当時のダブリンはITバブルで土地の高騰が激しいと言いながら、不動産のちらしに目をやっていた。夫人が、電車から見えたスラム街の様子はひどいわと言ったのが、印象的であった。意気投合した私たちは、シカゴの南は治安が悪いのでタクシーを利用すべしという知人の忠告を無視し、電車に乗った。仕事帰りの、多人種の混じる群衆とともに改札口を出て、その夫婦と別れた。

ミシガン湖から吹きよせる風は冷たい。そぼ降る雨の中を、翌日は禁酒法時代、マフィア関連のホテルや、女性キリスト教禁酒同盟(WCTU)の第二代会長フランシス・ウィラードの育ったエヴァンストンの邸も訪ねた。20世紀初頭の新移民の流入と人種間の軋轢が、禁酒運動に拍車をかけたと言われている。新移民のカトリック教徒とアメリカ生まれのプロテスタントとの文化的衝突がその一因であることは理解できる。同時期、南部から北上した黒人の住む地域も広がり、1920年代のシカゴは人種的な住み分けの最も明確な街であったと聞いている。現在は、ノーベル賞受賞者が輩出したシカゴ大学やノースウェスタン大学、シカゴ美術館をもつ文化都市であると同時に、20世紀初めからの格差社会は依然として続いている。

それでも、温かい支援の手がさし伸べられなかったわけではない。オークパークの〈19世紀女性クラブ〉は移民の子供や家族に無料の英語のクラスを提供し、アメリカ式の生活様式を習わせ、図書館やプールも運営した。その活動は今も続いているし、ジェイン・アダムズのセツルメント運動は有名である。この近くで育ち、努力してプリンストン大学とハーバード法科大学院で学んだ才媛が、オバマ夫人である。

若い大統領夫妻に希望を託すと同時に、私たちは日本国内の外国人労働者や、介護のためにアジアから来日する女性労働者の現実にも目を注ぎたい。眼をそむけず問題を直視し、研鑽を積む姿勢を謙虚に貫きたい。(上野和子)